



(左上)人形も現代になると「妖怪ウォッチ」。子どものお祭りなのだから、今年からは子どもが喜ぶものにかえたそう。(右上)「めーらっせ」から帰ってきたらお餅が待っていた！みんなで小屋の中でいただきます。



(右下)お賽銭を入れた人に渡す菓子包みの準備は高学年がお手伝い。さて、露店もないのに、なぜこんなに子ども達がんばるのか、みなさんちょっと不思議じゃないですか？ 実は、なんと伝統的に集まったお賽銭は、子どもたちが手伝ってくれたお駄賃になるのだ。「だから、昔は必死で回ってさ、くれない家の前ではしつこく待ってたりしてさ(笑)あの頃は、子どもたちだけで回ってたし、楽しかったよ」とは、広沢さん(父)の談。横でふたりの椎野さんも笑っているから覚えがあるのだろう。今は学年や準備からの出席率による多少の変動はあるが、さすがに上限は定額制になっているのだが、当時は終わった後にお賽銭箱をひっくり返して全部山分けわけしていたというのだから、当時の子どもたちの力の入り方は容易に想像できる。それにしても、合理的なナイスアイデアではないか。



も引かれて照明もあり、もうこれは立派な「戸建て」なのだ。

夕方になると30人ほどの子ども達が集まり、みんなうれしそうに小屋の中へ飛び込んでいく。道祖神のお祭りは、子どもたちのお祭りだから、この小屋の「世帯主」もこの子達なのだ。

この小屋は、近くの辻にお祀りしてある道祖神をここに移してきて、地元の人達がお参りに来るための場所。お賽銭箱にお賽銭を入れて、お線香をあげると、子どもたちからお返しのお菓子包みとみか

んをもらえるという、ある意味、即ご利益があるシステム。

しかし、中にはお参りに来られない人や、うっかり忘れている人もいる。そんな人達のために「めーらっせ」部隊がいる。子どもたちが太鼓を叩き「めーらっせ、めーらっせ。ドーソージンにめーらっせ！」

と歌いながら、竹にくくりつけたお賽銭箱を担いで家々を歩き回る。家から出てきてお賽銭を入れた方に同じようにお菓子とみかんを渡す。「めーらっせ」というのはなんと云っているかという「参

らっせ」。つまり、「道祖神にお参りください。」と言っているのだ。

この向原がある前羽地区は道祖神のお祭りの時に人形を飾るという珍しい習慣がある。しかも、結構盛大に飾る。起源は定かではないのだが、地元の方に聞いたところでは、初まりは江戸後期にまでさ

かのぼるといいう。娯楽の少ない時代、年末から子どもたちが小屋を建て、道祖神のお祭りをやった後、さらにその小屋の廃材で歌舞伎役者を模した人形を作って楽しみ、最後はどんど焼きでお飾りと一緒

に浜で燃やしてお餅を食べたらしい。

現代の21世紀の向原の末裔の人々もまた、夜に子ども達が集まり、太鼓を叩いて歌いながら歩いたり、浜でデツカイ焚き火をして、餅を焼いて食べたりなんていう、ある種普段できない「ワイルド」な

娯楽としてこのお祭りを楽しんでいるように思う。これぞ地域のコミュニティだからこそできる娯楽である。ぜひ22世紀、23世紀と時代が変わっても楽しみ方を変えながらずっと続けてほしい。

